

ヒューマニストたちの競演

——森本あんり編「人間に固有なものとは何か―人文科学をめぐる連続講演―」——

森 一郎

相変わらずどこもかしこも大学改革——という名の再編^{リストラ}である。私の勤務先では、大学院博士課程設置に続いて、二年少し前ようやく学部再編を果たしたと思つたら、来春からは修士課程再編がスタート、さらにその次にはと、新学部完成年度に向けて「第二段階の改革」案が進行中である。看板を掲げたそばからすげ替えると顧客の信用を失うのでは、といった懸念が教授会でも真顔で表明されるほどである。そういう笑うに笑えぬ狂騒がそこいらじゅうの大学で起きているのかと思うと、出口なしの暗澹たる気持ちになる。

移ろいやすいこの世にあつて変わらないものを見据え続けるのが学問だと信じている私は、新しさだけを売り物とする再編商売路線には抵抗せざるをえない。それでもKY回避型多数派に押し切られて新学部所属となり、寄り合い所帯みたいな新「人文学科」共通の「人文学入門」なる新科目を分担するはめになった。授業題目「人文学とは何か」が正直に示す通り、それまで哲史文の各学科専門科目を講じてきた担

当教員の誰一人、「人文学」の何たるかが分かっていない。そんな俄か授業の期末試験で「現代における人文学の意義」を解答させられた新入生は迷惑千万だったことだろう。だが、最後にアンケートをとってみると、意外にも、面白かったという感想が多かった。慣れない科目担当に苦しめられた私自身、終わってみると案外充実感があつた。少なくとも徒労感のみではなかった。

なぜこんな私事から始めたのかと言えば、本書『人間に固有なものとは何か』を読んで、今述べたささやかな体験の意味が少しだけ分かったような気がしたからである。

本書は、国際基督教大学（ICU）「人文学科」を永らく支えてきた担当者による連続講演の記録集である。戦後にもともと単一教養学部として出発したICUは、学際性に富む人文学科を当初から擁し、優秀な卒業生を数多世に送り出してきたことで知られる。ところが、本書の「はじめに」に記されているように、二〇〇八年には学科すらも廃止し、リベラル

アツ大学の一学部制を徹底させるといふ「改革」を断行したのである。今さら「人文学科」のくくりを導入してはオタオタしている一周遅れ走者とは大違いだ、が、伝統学科「消滅」という出来事には、関係者の間にそれなりの苦悩もあつたことは想像に難くない。講演者の一人、田中敦（哲学）は、「神は死んだ？ それなら人間性は死んでいないのか？」という講演タイトルを掲げているが、この反問の背後には、「人文科学科は死んだというのに……」との溜め息が洩れ聞こえるかのようである。

他方で、危機感や終末意識を抱えているからこそ、「人文学・人文科学（Humanities）」の中心問題であるべき「人間性」とはそもそも何か、という自省の問いが、いつそう切実なものとなる。これまた田中の紹介する通り、日常的に馴染みの道具の道具性が、見当たらないとか壊れたとか邪魔であるとかいった欠損の様態においておのれをまざまざと示すように、存在への問いは存在忘却のただ中でこそ焚きつけられるというのが、ハイデガー存在論の言い分であった。それと同じく、人間性への問い、ひいては人文科学への反省は、ヒトを無差別に扱う科学的平等主義が吹き荒れる時代、人間に固有なものが決定的に閉却され、人文科学が葬り去られようとするまさにそのときこそ、おのれ自身を声低く主張する。本書は、そうした人文科学の自己主張の試みだと言つてよい。

学生向けの一般講演ではあるが、いやだからこそ、本書はまずもって、人文科学に携わる専

門研究者にとつて恰好の手引書となつてゐる。学生には学際的知を身につけろと求めておきながら、自分は狭い専門領域を一步も出ようとしない教員にとつて、「人文学とは何か」を正面切つて講ずる経験そのものが、教員自身の「啓蒙」に資するところ大である。それと同じように、十二人の人文科学者が専攻分野の立場に拠りつつ、人間性とは何か、と学生に正面から問いかける連続講演は、当の講演者たちが相互に刺激し合う得難き機会となる。本書の特徴の一つは、各講演後に交わされた質疑応答が併録されている点だが、その読みどころは——学生からの鋭い質問もさることながら、それ以上に——教員間の活発な応酬にある。専門を異にする研究者同士が、学生相手の講演を互いに傍聴し合い、学生の前で論じ合うというのは、なかなかしんどい経験であろうが、その分知的刺激をかき立てる「協演・協奏」となる。それだけではない。十二講が丸ごと、質疑応答や推薦図書も含めて、人文科学の真骨頂をめぐつての「競演・競争」の観を呈しているのである。聴講学生はきつと、どの講演が面白かつたか順番をつけただろうし、それと同じ審査員特権を、本書の読者も与えられるわけである。残酷と言えば残酷だし、受け狙いの話に人気が集まるのも困りものだが、公平な判断力と批評精神そのものが人文主義的伝統の要求するところであつてみれば、それはそれで受忍すべき厳しさであらう。

公平を旨とすべき書評の枠内ながら、特権利用を恐れず、十二講を読み比べての率直な感想を、以下記してみた。

質疑応答から始めると、並木浩一（聖書学）の「古代イスラエルにおける人間の自由と尊厳」の講演後の川島重成（西洋古典学）との掛け合いが興味深い。古代ユダヤと古代ギリシアの正面対決（代理戦争？）であるかに見えて、「ユダヤ教への正統主義への批判」たる「ヨブ記」が、じつはギリシアの作劇法に接近している、と指摘されたりする。大学内の規律に関するキリスト教の没批判的傾向に対して憂慮の聲が上がっているのも、聞き逃がせない。詳しい内部事情は分からないが、勤務先の現状を思うにつけ、「神は死んだ？それならキリスト教主義リベラルアーツ大学は死んでいないのか？」と言いたくなる。

それはさておき、リベラルアーツや人文主義の精髓は何といつても古代ギリシアにある。ICUでギリシア悲劇の入門講義を長年担当した川島の「人間と人間を超えるもの」は、本書の基調講演とも言うべき芳醇さを湛えている。名誉と正義、怒りと復讐という、きわめつけのギリシア的テーマが、ホメロス『イリアス』、アイスキュロス『オレスティア』三部作、エウリピデス『ヒッポリュトス』の豪華三本立てで論じられる。ソフォクレスはあえてスキップしているが、それについては末尾の「思い出の三冊」で言及されるオイディプス論考を参照されたという仕掛けである。（ちなみに、私が人文学入門のテキストに選んだのは、川島教授ばり

に、『オイディプス王』と『コロノスのオイディプス』だった。ソフォクレス全作品の翻訳を一冊に収めたお買い得文庫を教科書指定したら、学生から「高い本を買わされた」と最後のアンケートに書かれた。「良書を買うべし、それが教養というものだ」と声を大にして学生に説き続けることこそ、人文学入門の極意だと思ひ知らされた。ICUならではの——昨今の改革路線、とは言わないが——古典愛好精神の美風は、大学における教養教育の質を高めてきたと私は信ずるし、今後もそれが継承されてゆくことを期待している。

その一方で、人間性をめぐるヒューマニストたちの競演たる本書は、人間の人間らしさへの問いが、あくまで多角的な探究であるべきことを、模範的に示している。ゲアハート・シェーパース（ドイツ文学）の「現代社会における「人間性・人文科学」の役割」は、ルネサンス期の画家ブリューゲル（父）の描く「パベルの塔」や「イカロス墜落」に、近代技術批判の先見の明を認める。ツペタナ・クリステワ（日本文学）の「人の心」は、「竹取物語」や和歌の数々に、不死追求とは異なる「心」の無限の存在論を見出す。金澤正剛（音楽）の「音楽はなぜ存在するか」は、グレゴリオ聖歌の淵源たる「アンブロジウス聖歌」が、アウグスティヌスの恩師直伝であつたというルーツを探る。小玉クリステイーヌ（フランス文学）の「聖アントワーヌの誘惑」は、禁欲修道の聖者伝説が、近代作家フロベールによって科学的好奇心の怪談

に仕立てられたことを描く。古藤友子（中国思想）の「朱子の格物致知説」は、中国思想の百科全書のような朱子学に、諸原理の多極的拮抗という発想が躍如としていたことを概説する。岩切正一郎（文学）の「恋・自然・日常」は、シユルレアリスムの洗礼を受けたジャン・フォランの詩に、第二次世界大戦の都市爆撃による記憶喪失の危機と、それゆえの物への気遣いが結晶していることを報告する。

本書の最後を飾るのは、佐野好則（西洋古典学）の「ホメロス叙事詩における運命表現」である。古代ギリシアの怒りと復讐の世界が、再び姿を現わす。ここでは、ウエルギリウス『アエネイス』まで含めての、三大叙事詩の冒頭に込められた、神々と人間との相克というモチーフが対比される。神から贈られた禍に見舞われ、身から出た過ちに苦しめられるこの地上に、果たして救いはあるのか。この問いとともに読者はもう一度、競演の幕開けへと誘われることになる。古代ギリシアから古代ローマへ、ポリスの世界から福音書の世界へ。編者でもある森本あんり（神学）の「ゆるしの神学と人間学」は、本書のテーマを余すところなく表現している。ここに急ぎ焦点を絞ってみたい。

古典古代的人間類型は、人間に固有なものが「復讐」にあることを赤裸々に語っている。対等であるべき者たちの間で、為されたことを返報し合うことは、正義であり人間の尊厳ですらあった。ニーチェの語った主人道徳と奴隷道徳との境目もここにある。復讐しないことは、復

讐できない弱さであり、醜さ、劣悪さであった。キリスト教の登場という事件とは、この復讐の精神への挑戦にほかならなかった。復讐ならざる「赦し」という応答が人間にギリギリ可能だということを、イエスは教えたのである。アーレントの注目する福音書のくだりが証言している通り、あえて何もしないというこの行為——無為の自由——は、「奇蹟」というふうに当時の人々には映った。とてもありそうにないことが、そこに忽然と起こったからである。取り返しのつかぬことを取り返し、新しく始めるということをやつてのけるこの人は、いったい何者か。この驚きから、古代における価値転倒の狼煙が上がったのである。

森本は、人口に膾炙したポープの言葉「*error is human, to forgive divine*」の解釈学的吟味でもって話を進める。これは、「過つのは人、赦すのは神」と通例解される。キリスト教の伝統そのものが、この解釈に加担してきた。「神が赦して下さるのだから、われわれも赦し合わねばならないのだ」と。だが、福音書はこれと反対のことを告げている。「もし人の過ちを赦すなら、神もあなたがたを赦すであろう」と。人間業でないような不可能事を為し能う者が「神的（*divine*）」と称されるとき、かえってそれは「優れて人間的（*excellently human*）」の意である。翻ってみれば、卓越した人間性を志向するあくなき追求こそ、古典的ヒューマニズムの真意であった。ひよつとするとキリスト教とは、苦悩や傷を舐め合う「同情の宗教」

——弱さの人道主義——などではなく、むしろニーチェの意味における「強さのヒューマニズム」の一形態だったのではないか。森本の、赦しこそ人間に最も固有なものだとする挑発的提題に乗せられて、ついつつかりそんな問いをめぐらせてみたくなる。

超人かは知らないが、キリスト教的ヒューマニズムの系譜に連なる名前が、本書の随所に出てくる。岡野昌雄（哲学）「自己を知る」は、石原謙との出会いがアウグスティヌス「告白」との生涯にわたる付き合いを決定づけたと述懐している。本コンクールで最も顕彰された思想家にして宗教家は、森有正であろう。その存在の大きさに改めて思いを馳せた。

（もり・いちろう 東京女子大学現代教養学部教授／哲学）

2011年3月刊

森本 あんり 編

人間に固有なものとは何か

人文科学をめぐる連続講演

人間的であるとはどういうことか。人文科学の諸分野からこの問いに複眼的に答える試み。創立以来1)ベラルアーツ教育を実践してきた国際基督教大学が Humanities の意義と価値を発信。細分化する現代の知を前に、大学で何を学ぶべきかを模索する学生に、また教養教育のあり方を模索する教育者に、熟慮すべき問いを投げかける。

菊判・308頁・3,000円

ISBN 978-4-423-10107-0